

平成30年6月22日現在

機関番号：32689

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2016～2017

課題番号：16H07268

研究課題名(和文) 狩野派表絵師の研究 山下狩野家を中心に

研究課題名(英文) A Study of Omote-Eshi in Kano- School: Focusing on Yamashita- Kano Family

研究代表者

柏崎 諒 (KASHIWAZAKI, Ryo)

早稲田大学・會津八一記念博物館・助手

研究者番号：10779078

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：江戸時代の狩野派がなぜ画壇の頂点に位置できたかを時代の流れの中で論じることが目的とする。そのために各時代の狩野派絵師の活動について考察を行う。本研究期間は、江戸時代初期の狩野元俊と江戸時代後期の狩野了承についての研究を行う予定であった。しかし、元俊について新たな作品調査の必要が生じたため、元俊の研究のみを行うこととした。

元俊は、江戸中期以降の狩野派絵師とは異なり、組織とは関係なく活動を行っていたことを述べ、江戸時代初期の狩野派絵師が自由な活動を行っていたことを論じた。

研究成果の概要(英文)：This study aims to analyze why the Kano school of the Edo era was considered as the developing the best artists of that era. For this purpose, I will consider the activities of the Kano school artists of each era. This research originally planned to focus on Kano Gensyun of the early Edo period and Kano Ryosho of the late Edo period. However, while investigating Gensyun's works, I discovered evidence that has led me to focus solely on Gensyun. Gensyun stated that unlike the Kano school painters after the middle Edo period, he was completing activities regardless of the organization and discussed how the Kano school painters of the early Edo period could perform activities freely.

研究分野：日本美術史

キーワード：狩野派 表絵師 山下狩野家 御用絵師 御抱え絵師 日蓮宗

1. 研究開始当初の背景

狩野派は室町幕府八代将軍の足利義政の御用絵師であった狩野正信を初代とする画派である。正信の子で二代目の狩野元信は、工房での制作体制を整えた事、正信以前には漢画ややまと絵といった絵画の分野ごとに画を手掛ける絵師が異なっていたのに対し、元信はすべての分野の画を制作することが出来た上に、それまで元来の漢画の模写が中心であった漢画の分野において狩野派の画風を確立した事の二点により狩野派の礎を築いたとされる。そして、元信以降も各時代の政権担当者として強く結びつくことで画派を維持していったことが狩野派の特徴のひとつとされる。

これまでの狩野派研究では元信をはじめとする棟梁と言われる指導的立場にあった絵師を個々に研究することが多かった。また、棟梁等の中心絵師を見る事でその時代の狩野派の動向や勢力について論じる事はあった。しかし、時代の流れの中で狩野派全体の動向を考察した上で、組織の変遷について論じられることはなかった。

2. 研究の目的

狩野派は江戸時代には、最大の画派となる。全国各地で狩野派絵師が活動し、画壇の頂点に位置していた。そこで、狩野派がいかにして画壇の頂点に位置することが出来たのかを論じることを本研究の目的とする。そのためには、中心絵師のみに注目し、各時代で個々に研究をするだけでは狩野派の組織を論じることは出来ないと考えよう。それぞれの時代で狩野派の下位の構成員であった表絵師等の絵師に注目し、時代の流れの中で狩野派の組織について考察することで、本研究の目的達成を目指す。

3. 研究の方法

室町時代から江戸時代後期までの各時代に活動した狩野派絵師をそれぞれ取り上げる。そして、その絵師の動向を探ることで、組織の変遷について論じたい。多くの狩野派絵師の中でも、元信の次男とされる狩野秀頼に始まる山下狩野家とその周辺絵師について考察することで本研究の目的を達したい。

山下狩野家は狩野家血縁の家系の中でも元信にさかのぼるといふ由緒のため、狩野派内でも重要な家系であった。とはいえ、傍系である事には変わりなく、重用はされたが指導的立場に立つことは少なかった。このため、棟梁等ではない絵師の中では、現存作例や文献資料が比較的豊富であり、研究を進展させやすいと考えよう。

具体的な研究内容としては、(一)室町時代後期の制作と考えられる日蓮宗総本山身延山久遠寺の伝狩野元信筆の旧障壁画群、(二)江戸時代初期の狩野派の中心的絵師の一人で山下狩野家の初祖とされる狩野元俊、(三)文化文政期に活動した山下狩野家の分

家深川水場狩野家の養子に入り、当主となった狩野了承、(四)日光東照宮等の徳川家霊廟修復事業、の四点を考えている。

上記で述べた(一)から(四)の内、(一)については本研究開始前にすでに発表済みのため、ここには記さない。本研究では(二)、(三)を行う予定であったが、(二)の狩野元俊について新たな現存作例の調査の必要が生じた。そのため、研究計画の変更をして、本研究期間においては(二)を中心に調査・研究を行うこととした。(二)についての研究成果については以下に記す。(三)、(四)については2018年度以降に研究およびその成果の発表を行う予定である。

また、本研究では江戸時代中期の視点が欠けているが、この点については元俊の子で山下狩野家二代目の狩野春雪についての考察を2019年度以降に行う予定である。

4. 研究成果

狩野元俊(天正16年-寛文12年〔1588-1672〕)は田中敏雄「江戸時代初期狩野派の動向 狩野元俊の場合」(『芸術：大阪芸術大学紀要』12号、1989)で既に日蓮宗寺院関係の作事の多さが指摘されていた。報告者は現存作例について改めて検討し、日蓮宗の中でも日蓮宗中興の三師と言われる日重(天文18年-元和9年〔1549-1623〕)、日乾(永禄3年-寛永12年〔1560-1653〕)、日遠(元亀3年-寛永19年〔1572-1642〕)ゆかりの六条門流の寺院が多いことに着目した「狩野元俊の画業と日蓮宗」(『法華學報』24号、2016)を執筆している。拙稿では、日蓮宗との関わりが元俊の個人的事情によるものである事を述べ、江戸時代中期以降には組織としての活動が主になっていた狩野派が江戸時代初期には比較的独立して活動を行っていたことを論じた。

しかし、本研究開始前において、報告者が把握していた現存作例26件中実見出来ているものは8件のみであった。そこで、元俊の現存作例を可能な限り調査し、制作年代を整理することで元俊の活動について考察することとした。元俊は天正16年(1588)生まれであるため、絵師人生のはじめには桃山時代の狩野派画風を学んだと考えられる。しかし、狩野永納によって延宝6年(1679年)に刊版された『本朝画史』で「狩野派を一変す」と評された狩野探幽の登場により狩野派は画風が文字通り一変している。探幽の画風が確立したのは一般的に名古屋城本丸御殿障壁画が完成した寛永11年(1634)と言われている。

また、江戸時代初期は画風だけでなく、狩野派の組織としてのあり方も変化している。元俊は『東洋美術大観』第五冊(審美書院、1909)所引の、元和9年(1623)の狩野貞信臨終時に書かれた誓書に署名していることから、当時集団指導体制であった狩野派の方

針を決定することのできる中心的絵師の一人であったとされる。しかし、その後狩野派の体制は探幽の単独指導体制に移行していく。画風や体制といった周囲の環境が目まぐるしく変化する中で、元俊がいかに活動したのか考察することで、江戸時代初期の狩野派の体制について論じることとする。

2016年度は狩野元俊の画風変遷について検討すべく、肖像画の作品調査を中心に研究を進めた。主なものとしては山梨県・本遠寺において狩野元信筆と言われる「日重・日乾・日遠上人像」など計6点、京都府・隣華院において「脇坂安元像」、兵庫県・たつの市立龍野歴史文化資料館において「脇坂安元像」、「孔聖像」の調査を行った。「日重・日乾・日遠上人像」については調査により「日遠上人像」のみが元俊筆であり、他2点は日遠上人像より先に制作されたものであることを確認できた。

先述の通り、元俊は田中敏雄氏のより、日蓮宗寺院関係の現存作例の多さから日蓮宗との関係が深いことや脇坂安元と交遊があったことが以前より言及されてきた。また、報告者は「狩野元俊の画業と日蓮宗」(『法華學報』24号、2015)において元俊が日蓮宗の中でも京都・本圀寺を中心とした六条門流との関係が色濃くみられることについて論じている。2016年度の調査を通して元俊の画風変遷について一定の結論を得ることは出来なかったが、本遠寺における作品調査によって元俊と日蓮宗の関係において新たな面を見出すことができた。この点についてはあとで詳しく述べる。

2017年度は江戸時代の狩野派表絵師の動向を探る一環として狩野了承(明和5年 弘化3年〔1768 1846〕)の作品調査および研究を中心に行う計画であったが、狩野元俊(天正16年 寛文12年〔1588 1672〕)の作品調査および研究を2016年度に引き続き行った。

これは、本研究開始前において、報告者が把握していた現存作例26件の他に、元俊筆「日蓮聖人画像」の存在が判明したためである。予定していた狩野元俊作品の調査は2016年度に終了したが、元俊の画業の上で「日蓮聖人画像」が重要な意味を持つと考え、計画を変更した。「日蓮聖人画像」の所蔵寺院は、既に2016年度に調査を行った山梨・本遠寺のほか、神奈川・妙純寺、京都・本満寺、新潟・妙宣寺、静岡・海長寺である。2017年度中に本満寺、妙宣寺、海長寺所蔵の「日蓮聖人画像」は調査を行うことが出来た。しかし、妙純寺に関しては先方の事情により2017年度中の調査が実施出来なかったため、2018年度に調査を行う予定である。

元俊には日蓮宗寺院が所蔵する3点の「涅槃図」(京都・本圀寺、静岡・妙海寺、奈良・蓮長寺)がある。それらが同一の手本を元に

制作されたことは拙稿において既に述べたが、その手本がいかなるものであったかの特定は出来なかった。一方で、現存する5点の「日蓮聖人画像」は神奈川・浄永寺寺蔵の「日蓮聖人画像」を手本として描かれたことが判明している。このことによって、江戸時代初期の狩野派絵師である元俊の制作状況の一端を知ることが出来るだろう。

元俊の現存作例を所蔵する寺院の内、元俊と日蓮宗の関係を考える上で重要なものは本遠寺、本圀寺、本満寺であろう。ここで三寺院について述べることにする。

本遠寺の開基は紀州徳川家の家祖頼宣、および水戸徳川家の家祖頼房の生母の養珠院である。また、開山は本圀寺を中心とする六条門流に属する日遠である。本遠寺に所蔵される元俊作品には「日蓮聖人画像」や「日遠上人像」など、4点であり、それらは元俊の画業の中では初期に位置づけられるものである。

本圀寺は頼房の子である徳川光圀が生母の追善供養を行ったことで「圀」の字の使用を許された寺院である。本圀寺には、六条門流の拠点となった求法院檀林があった。求法院では中興の三師の内、日重が講授を行い、日乾が講主を務めている。元俊筆の「涅槃図」は元俊が実母の追善供養のために寄進したものである。

本満寺は日蓮宗中興の三師のうち日重と日乾が住持を務めた寺院で、六条門流との関わりが深い。元俊の現存作例としては「日蓮聖人画像」を所蔵するが、こちらも本遠寺の所蔵作品と同時期の作と推察できる。

以上のように、日蓮宗中興の三師をはじめとする六条門流や水戸徳川家との関係がある寺院に元俊の画業の初期に位置づけられる作品が所蔵されることから、元俊と日蓮宗の関係は、六条門流や水戸徳川家との関係に端を発していると推測される。元俊が三師とどのような関係にあったか定かではないが、それぞれの生没年を考慮すれば、元俊は三師と直接の面識があった可能性がある。少なくとも肖像を描いている日遠とは直接面識があっただろう。六条門流との関わりは、拙稿「狩野元俊の画業と日蓮宗」の中でも述べているが、さらに2016、2017年度の調査・研究により、本遠寺の開基が水戸徳川家の家祖頼房の生母である養珠院である事に加え、頼房の子である光圀が母の追善供養を行った本圀寺で同じく元俊が母の追善供養を行っていることなど、新たに養珠院を始めとする水戸徳川家との関わりも想定できることがわかった。加えて、元俊の墓所が本圀寺末であった東京都墨田区の本法寺であることから、元俊自身、養珠院や水戸徳川家との関係だけではなく、六条門流などに対する信仰心があったと言える。

また、「涅槃図」が同一の手本から制作されたと考えられることや、「日蓮聖人画像」が由緒ある手本を基に描かれたことは、元俊の制作態度を表していると言えよう。すなわち、元俊は仏画を制作する際、教義的に意味のある前例を手本として画を制作する絵師であったということである。このことは、絵仏師などであれば当然といえるが、世俗画を手掛けることの多い狩野派絵師においては珍しいと言えよう。元俊は日蓮宗寺院を主体とした絵仏師のような活動をしていたと言えるかも知れない。元俊と日蓮宗との関係には元俊自身の信仰心もあった事を考慮すると、日蓮宗寺院が所蔵する現存作例の制作経緯は狩野派と日蓮宗ではなく、元俊と日蓮宗寺院との関係に端を発していると考えた方がよく、これは江戸時代初期には狩野派絵師は組織に縛られない活動が可能だったことの証左になるだろう。

以上で述べた、2016、2017年度の調査で判明した元俊の日蓮宗との関係の中に水戸徳川家の家祖頼房の生母養珠院が含まれることと、上記の元俊の制作状況の一端についての論考は2018年度中に発表する予定である。

また、2017年度に実施できなかった了承についての調査・研究も2018年度に行う。そして、2019年度以降に江戸時代全体を通した狩野派表絵師の動向についてのまとまった論考の発表を目指す。

5．主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 0 件)

6．研究組織

(1)研究代表者

柏崎 諒 (KASHIWAZAKI, Ryo)

早稲田大学・會津八一記念博物館・助手

研究者番号：10779078